2023年度活動報告

幼児期の親子を対象とした性の多様性に対応したシナリオによる「いのちのおはなし会」の実践

杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻：佐々木裕子、藤田千春、長谷川和子

1．活動の背景

性被害の増加、低年齢化が深刻な社会問題になっている。2023年4月から「生命(いのち)の安全教育」 が開始され、子どもの発達段階に応じた教育の充実が求められている。また、性的マイノリティへの社会的関心も高まり、命や性についての正しい知識とスキルによる性教育が重要である。私たちは大学を基盤とした地域貢献活動の一環として、幼児とその保護者を対象とした「いのちのおはなし会」（以下、おはなし会）に取り組んでおり、性の多様性に関するシナリオを加えたおはなし会の実践について報告する。

2．活動の目的

① 子どもたちが命の大切さを理解し、自分や周りの友達を大切にできる
② 子どもたちが自分の身体を理解し、プライベートゾーンを守ることが出来る
③ 子どもたちがこころの性の多様性を理解し、自分とは違う友達を大切にできる
④ 周りの大人たちが子どもからの身体や性に関する質問に向き合い教育的関わりを考える機会となる

3．対象および方法

手続き：保育園に直接、または三鷹市園長会にておはなし会開催の案内をした。
対　象：三鷹市と近郊の保育園の４歳児・５歳児と保護者
方　法：おはなし会のプログラムに基づき、2部構成とした。
【第1部】学生によるパネルシアターとエプロンシアター
いのちの誕生、出産、男女の体のちがい、プライベートゾーン、多様な心の性（30分）
【第2部】赤ちゃん人形の抱っこ体験と教員主導での保護者・学生・保育園との振り返り (15分)

【おはなし会で用いた表現】
男性器：おちんちん
女性器：赤ちゃんの通り道
子宮：赤ちゃんのお部屋
卵子･精子：命のもと
性交：お父さんの命のもとを
お母さんの命のもとに送り届ける
性器･胸･おしり：プライベートゾーン
性の多様性：一人ひとり違う心の色

【保護者用リーフレット】
・おはなし会の解説
・子どもの性の疑問にどう答える

4．今年度の活動実績

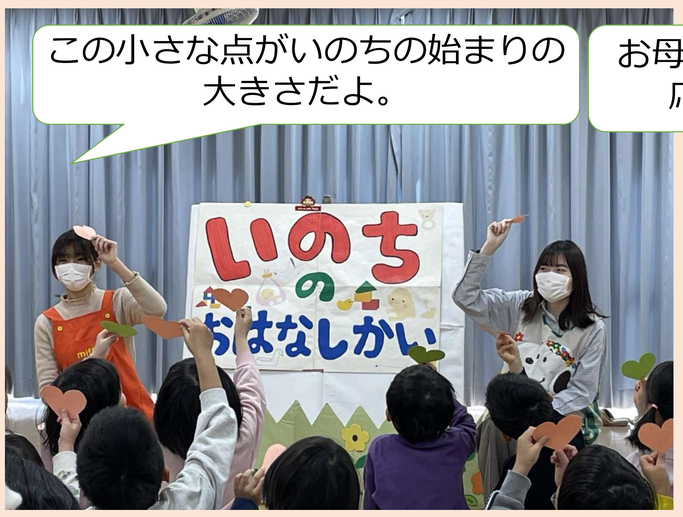
今年度は。8月と3月に保育園11園で実施した(表1)。参加者の総数は、子ども247名、保護者20名、保育士等保育園職員48名。学生12名、のべ44名の参加であった。

【子どもたちの反応】命の始まりから赤ちゃんの誕生までを実物大の胎児パネルと人形で説明するシーンでは、パネルをめくる度に歓声が上がり、赤ちゃん誕生を“頑張れ！”と声に出して母親を応援する姿が見られた。プライベートゾーンという言葉は子ども達に浸透しており、自分の体を守るために洋服を着ること、見られたり触られたりすることが嫌なときには“やめて！”と声に出して意思表示できていた。胎児人形を抱く際は、両手で優しく抱っこできていた。

【保護者の反応】性の多様性を色違いのハートの模型で表現し、好きなものや好きな人が違ってよいことを伝えたが、よかったとする反応がある一方で、子どもにわかりやすい伝え方の工夫が必要との意見もあった。また、家庭で子どもから身体や性に関する質問があった際、どう答えたらよいか、対応に困っている様子や、対応を外部に求める声があった。

表1．活動の概要

保育園	実施日時	参加者		
		子ども	保護者	保育士
A	8月　9日AM	30名	2名	6名
B	8月10日AM	20名	0名	6名
C	8月10日PM	25名	0名	4名
D	3月　4日AM	23名	7名	4名
E	3月　4日PM	18名	4名	6名
F	3月　5日AM	21名	2名	4名
G	3月　5日PM	23名	0名	4名
H	3月　7日AM	22名	0名	2名
I	3月　7日PM	25名	0名	3名
J	3月　8日AM	17名	0名	5名
K	3月　8日PM	23名	5名	4名



5．まとめ

コロナ前の頻度で対面でのおはなし会が実施でき、多くの子ども達におはなし会のメッセージを届けることが出来た。保育園からは子どもたちが集中して話を聞いていたこと、時代の変化に対応しておはなし会の内容が進化しており、今後もこの活動を続けてほしいとのと肯定的な意見が多数聞かれた。その一方で、保護者の参加者が少なく、開催方法の検討や工夫が必要である。